

小児用肺炎球菌ワクチンについて

えはら内科クリニック

江原 浩司 先生

肺炎球菌は多くの子どもの鼻やのどにいる細菌で普段はおとなしくしていますが、子どもの体力や抵抗力が落ちたときなどに、いつもは菌がいないところに入り込んでいろいろな病気を引き起こす、子どもの感染症の2大原因のうちの一つの細菌です。

肺炎球菌が起こす病気には、大人では肺炎が多いですが、子ども、特に2歳以下では脳を包む髄膜に菌が侵入して炎症を起こす細菌性髄膜炎があります。年間200人くらいが発生していて、命にかかわる場合や発達運動障害、難聴などの重い後遺症が残ることがあります。そのほかにも菌血症や肺炎、中耳炎などがあります。

これらの肺炎球菌による重い感染症を予防するために、2010年2月から子ども用の肺炎球菌ワクチンが使用できるようになりました。10年ほど前から使用している海外ではこのワクチンの効果により、肺炎球菌による重篤な感染症が激減しています。接種する時期は生後2ヵ月から9歳以下までの子どもですが、肺炎球菌による髄膜炎は約半数が1歳までにかかり、それ以降は年齢とともに少なくなりますが5歳くらいまでは危険年齢で、生後2ヵ月を過ぎたら早めに接種するよう勧められています。

ワクチンの接種回数は年齢により異なり、生後2ヵ月から6ヵ月までは合計で4回接種します。7ヵ月から11ヵ月までは3回、1歳は2回、2歳から9歳までは1回です。子どもの感染症のもう一つの原因菌であるインフルエンザ菌を予防するためのヒブワクチンやDPT3種混合ワクチンとの同時接種も可能です。

ワクチンの接種については、かかりつけの医師に相談してください。